

小学校教諭におけるジェンダー観と楽器選択の性差に対する認識の関係

問題と目的

男女というカテゴリーにあてはめて個人の能力を推測したり、男子と女子に対する働きかけを変えたりすることは、子どもたちの可能性を制限することになる。音楽教育とジェンダーの関連については、主に欧米で研究が行われており、音楽活動や、特定の楽器に対する好みや関わりが男女で異なることが報告されている。そこで、本研究では、小学校教諭のジェンダー観と楽器のジェンダー・ステレオタイプの関係に焦点を当て、楽器のジェンダー・ステレオタイプが楽器の能力の評価にどのように影響を与えるか、また小学生児童が楽器のジェンダー・ステレオタイプを獲得していくプロセスに影響する要因について検討を加えた。

方法

小学校教諭の楽器に対するイメージと称し、Google Forms を用いて調査を行なった。回答は32名（女性17名、男性15名、平均年齢34.84、 $SD=13.89$ ）の小学校教諭より得られた。質問紙は、(1)フェイスシート、(2)ジェンダー観、(3)小学校教諭の生徒に対する働きかけの自己認識、(4)楽器のジェンダー・ステレオタイプ、(5)楽器の性差観で構成された。

結果と考察

分析の結果、性別特性観と楽器の能力の評価に一部関連があることが明らかになったが、小学校教諭の楽器のジェンダー・ステレオタイプは、小学生児童の楽器のジェンダー・ステレオタイプの生産に加担していない可能性が示唆された。ジェンダー・ステレオタイプをもつ楽器の種類は、音楽の授業で演奏をする機会がほとんどないものであり、楽器のジェンダー・ステレオタイプの再生産に、小学校教諭が加担しているとは考え難い。また、小学校教諭のジェンダー観と生徒に対する働きかけには関連がないことが示された。教師自身が自覚している範囲であるため、実際の働きかけとは違う可能性があるが、教育に携わるものとして、男女を同等に均等に接しようとする意識の現れでもあるだろう。

武知（2005）の研究で明らかになった小学生の楽器のジェンダー・ステレオタイプと小学校教諭の楽器のジェンダー・ステレオタイプはほぼ一致していることから、成長過程で、楽器のジェンダー・ステレオタイプが変化していくことは少ないと考えられる。ステレオタイプの存在は、学ぼうとする楽器の選択の幅を狭めることとなるため、今後もステレオタイプを獲得するプロセスを検討する必要がある。

学校で一斉に使用されることが多い楽器には、ステレオタイプの認識が見られなかったことは、楽器のジェンダー・ステレオタイプの柔軟化の手がかりになるかもしれない。

SNS 上での攻撃行動と自己開示・仮想的有能感との関連の検討

—顔を見て話す場面との違いに着目して—

問題と目的

近年ソーシャル・ネットワーキング・サービス（以下、SNS）の利用普及が加速し、私たちの日常を豊かにしてくれている一方で、SNS 利用に関連する議論も盛んになっている。その中の 1 つである誹謗中傷等の攻撃行動は、人の心を傷つけ、時に誹謗中傷を受けた人の人生を左右するほどの影響を及ぼす問題である。そこで本研究では、匿名で利用される SNS に着目し、他者軽視傾向と匿名 SNS 上での自己開示傾向が、匿名 SNS 上での攻撃的な行動と関連するのかどうかを明らかにすることを目的とする。また、対面場面と比較し、匿名 SNS 上での攻撃行動のとりやすさ、自己開示のしやすさに差が生じるのかについても検討する。

方法

15 歳から 25 歳までの男女を対象に Google Forms による質問紙調査を実施し、137 名（男性：38 名、女性：98 名、X ジェンダー：1 名、平均年齢 20.48 歳、 $SD=2.05$ ）から回答を得た。質問項目は、(1)フェイスシート、(2)SNS の利用状況、(3)完全な匿名性を持つ SNS 利用場面での行動、(4)顔を見て話す場面での行動、(5)仮想的有能感尺度から構成された。

結果と考察

分析の結果、匿名 SNS 利用場面と対面場面の両方において、仮想的有能感の高さと自己開示傾向は、それぞれ攻撃的な行動をとることに影響を与えているものの、相互に影響を及ぼし合っているわけではないことが明らかになった。また、対面場面と比較して匿名 SNS 利用場面のほうが攻撃行動をとりやすいと考える傾向があることが示された。自己開示においては、実際に匿名 SNS を利用している者のみ対面場面と比較して、匿名 SNS 利用場面で自己開示をしやすいと考える傾向があることが示された。これらの結果から、匿名 SNS 上では対面場面よりも攻撃的な行動をとる傾向があり、その要因として仮想的有能感と自己開示がそれぞれ関連している可能性が示唆された。

また、実際に匿名アカウントを利用している人にとって、匿名 SNS は対面場面よりも自分のありのままをさらけ出せる場所であることが示唆された。自己開示の場として機能するのはいいことであるが、一方でそれが攻撃行動につながっている可能性も考えられるため、行き過ぎた自己開示を防止する方法を検討する必要があるだろう。

新型コロナウイルス感染時の原因帰属意識がマスク着用者に対する抵抗感に及ぼす影響 —統制の所在に着目して—

問題と目的

本研究では、統制の所在に着目し、コミュニケーション場面において、新型コロナウイルス感染時の原因帰属意識とマスク着用者（不織布マスク vs. 布製マスク vs. ポリエステル製マスク）に抱く抵抗感に関連があるのかについて検討することを目的とした。新型コロナウイルス感染拡大から今日において、効果的な感染対策の観点から不織布マスク以外のマスクを着用している人を非難する「不織布マスク警察」が現れ社会問題となっているが、彼らの心理的プロセスやマスクの種類と着用者に対してどのような感情を抱くのかについて論じられた先行研究はない。これらを知ることで、多様化するマスクの中で何を選択すれば相手からどう思われるのかについて知る手がかりの1つになり、より円滑な対人関係の築きを促進化させると考えられるため、本研究ではこれについて検討を行った。

方法

2021年10月下旬にGoogleFormsを用いてアンケート調査を行った。回答は、21歳から25歳の103名（男性：35名、女性：66名、その他：2名、平均年齢21.85歳、 $SD=0.95$ ）から得られた。アンケートは、(1)フェイスシート、(2)新型コロナウイルス感染時の原因帰属意識、(3)マスク着用者に対する抵抗感、(4)回答者が抱く抵抗感についてマスクに意識が向いているか、(5)マスク着用者と実際に知り合いか、(5)身の回りでワクチン接種がどの程度進んでいるかで構成されていた。

結果と考察

分析の結果、新型コロナウイルス感染時の原因帰属意識に主効果は認められたものの、それと3種類のマスク着用者に対する抵抗感には関連性がないことが明らかになった。また、マスク着用者に対する抵抗感において、ワクチン接種の進み具合の主効果が認められたが、マスクの種類的主効果、また両者の交互作用は認められなかった。これらから、若者世代では経済的負担が少なくファッショナブルなポリエステル製マスクや布製マスクの支持もあり、マスクの種類によって抵抗感に違いが認められないことが考えられた。くわえて、日本人は思いやりの強さから、自分が感染することよりも相手に感染させることを躊躇する傾向が示唆され、周りのワクチン接種が進んでいない場合には対面ではなくオンライン上でのコミュニケーションの方が、対人関係の悪化に繋がりにくいことが推察された。

本研究は、新型コロナウイルスの重症化率が低い若者世代を対象に扱い、感染拡大が緩和されていた時期に行われたものである。重症化のリスクが高い高齢者や、感染対策意識が引き締まっている感染拡大期において調査を行えば、また異なる見解が見られる可能性が示唆される。対象年齢や調査時期を変化させるなどして、今後も検討していく必要があると言えよう。

被受容感・被拒絶感が開示抵抗感に及ぼす影響

—友人関係の観点から—

問題と目的

日々の生活における他者と関係を築いていく上でお互いに様々なことを開示しあう。しかし、何でも簡単に自身に関することを開示していけるわけではなく、人によって自己開示をすることへの抵抗感（以下、開示抵抗感）の強さが変化する。開示抵抗感には周囲のフィードバックの影響を受けているため、自身の周囲からの評価への自己認識も開示抵抗感に影響を与えているのではないかと考え、被受容感・被拒絶感を取り上げた。本研究では、被受容感・被拒絶感が開示抵抗感へ及ぼす影響を検討することを目的とした。さらに、相手が親しい友人の場合と知り合い程度の友人の場合で被受容感・被拒絶感と開示抵抗感の関連を比較し、被受容感・被拒絶感が仲の良さによって変化するのか、開示抵抗感との関連に差があるのかも検討した。

方法

2021年10月上旬から11月上旬にかけて、Google Formで作成した質問紙を用いて大学生110名（男性31名、女性76名、性別無回答3名、平均年齢20.86歳、 $SD=1.26$ ）に調査を実施した。親しい友人を思い浮かべたものと知り合い程度の友人を思い浮かべたものの2種類を作成し、回答者の友人に自身の失敗経験について話すことを想定した上で質問を行った。質問紙は（1）フェイスシート、（2）想定した友人との親密度、（3）自己開示の否定的効果に関する項目、（4）被受容感尺度、（5）被拒絶感尺度で構成された。

結果と考察

分析の結果、親しい友人条件、知り合い程度の友人条件ともに、被受容感・被拒絶感と開示抵抗感との関連が一部認められた。親しい友人は全体的に相関の数値が高かったことから、被受容感が高い人は親しい相手に話しやすく、被受容感が低い、もしくは被拒絶感が高い人は親しい相手でも話しづらいつと考えることができるため、親しい相手ほど人によって抵抗感が大きく左右すると捉えられる。知り合い程度の友人は被受容感の「好意」「信頼」の2因子のうち信頼のみ関連があったため、知り合い程度の友人の方が印象の変化を気にすることなく、意外と気軽に話しやすいと感じる人もいないのではないかと考えられる。全体として、拒絶されたくない、相手からの信頼を損ないたくないという思いが特に開示抵抗感に影響を及ぼしていると示唆された。

さらに、開示抵抗感の「対自的傷つき」「対他印象の低下」という2因子のうち対他印象の低下と各尺度との関連において親密度との有意差による違いが明らかになった。すなわち、親しい友人への印象低下を恐れる傾向があると考えられる。

高校生における「おそろい経験」

—おそろい経験者の特徴とおそろい経験の意味づけに着目して—

問題と目的

本研究では、“友人または友人グループにおいて、おそろいをするという全員の同意が伴っている上で、一緒に購入した同じモノを使用すること”を「おそろい経験」と定義して検討を行った。友人関係が表面化している現代においては、同じモノを一緒に持つだけの手軽さが特徴であるおそろい経験が選択されやすくなっているのではないかと考えた。高校生になると、友人関係において異質性・独自性を重視するようになるといわれている。そこで、パーソナリティやおそろいの提案者などの様々な要因によって、おそろい経験の有無やおそろい経験への意味づけが異なると推測し、高校生でおそろい経験をする人の特徴や、おそろい経験への意味づけの違いを明らかにすることを目的とした。

方法

大学生を対象に、高校生時代のおそろい経験と友人関係について Google Forms を用いた質問紙調査を実施した。18歳から22歳までの計132名（女性102名、男性27名、性別無回答3名：平均年齢20.32歳、 $SD=1.35$ ）の回答を分析対象とした。質問紙は、(1) フェイスシート、(2) パーソナリティに関する項目、(3) 「おそろい経験」の経験に関する項目、(4) おそろい経験への意味づけに関する項目、(5) 友人関係の程度に関する項目で構成された。

結果と考察

調査対象者132名のうち、81名が高校生でおそろい経験をしたことがあると回答した。したがって、異質性・独自性を重視すると言われてしている高校生においても、友人とおそろいへの需要が十分に高いことが明らかになった。一方で、友人関係への不安が高い人のほうが低い人よりもおそろい経験への負担感が高いことが示されたこと以外では、パーソナリティとおそろい経験への意味づけにおいて関連は見られなかった。

次に、おそろい経験への負担感の平均値が最も低かったことと、友人関係への不安が低い人のほうが高い人よりもおそろい経験をしていることが示された。この結果を踏まえ、おそろい経験には友人関係を低める意味づけはなく、むしろ相手とつながっているという安心感から、友人関係を維持するという意味があると考えられる。本研究では、このように相手とつながっていると実感する意味を持つおそろい経験を「関係維持的おそろい経験」と提案した。

おそろい経験への意味づけと SNS との関連について、おそろい経験場面の写真を撮影したり、その写真を SNS に投稿したりした人のほうが、おそろい経験への楽しさや周囲から仲が良いと見られていると感じるという因子が高かった。したがって、高校生のおそろい経験には、おそろい経験という行動そのものよりも、おそろい経験場面の写真を SNS に投稿したり、おそろい経験の“場面”や“写真”を手元に残したりすることに意義があると考えられる。本研究では、このように SNS などを通して周りに自分たちの関係を示す意味づけを持つおそろい経験を「関係呈示的おそろい経験」と提案した。

競争経験と競争心の関連

—競争を経験する時期の違いに着目して—

問題と目的

現代の教育制度において、子どもたちに競争をさせることを懸念する声が上がっている。そうした中で本研究では、競争を多く経験する時期の違いに着目し、過去の競争経験が競争状況における認知や行動とどのような関連があるのかを検討することを目的とした。

方法

Google Forms を用いたアンケートを実施し、18歳から23歳の男女133名(男性：19名，女性：108名，その他：6名，平均年齢21.31歳， $SD = 0.93$)から回答を得た。アンケートは、(1) フェイスシート，(2) 多面的競争心尺度，(3) 過去の競争経験，(4) 自己受容尺度，(5) 他者受容尺度で構成された。

結果と考察

分析の結果、「小学校以前」の時期において、競争経験量と競争心に強い関連が示され、競争を経験する時期の違いによって競争心の形成に与える影響が異なることが明らかとなった。また競争を多く経験することは、自己目標の達成や自己成長という個人的な動機づけによって生じる競争心につながりやすく、むしろ他者に勝りたい、他者の期待に応えたいといった対人的な動機による競争心を高めることが示唆された。

勝利経験量と競争心の関連については、「小学校以前」「高等学校」の時期において、勝利経験量と競争心に強い関連が示され、勝利を経験する時期の違いによって競争心の形成に与える影響が異なることが明らかとなった。また勝利経験量はほとんどの時期において「手段型競争心」との関連が示され、過去に勝利を多く経験していることは、その時期に関係なく、競争場面において競争を自己目標の達成や自己成長の手段として捉える志向と関連があることが明らかとなった。

また自己受容と他者受容と競争心の関連については、自己目標の達成や自己成長という個人的な動機づけによって生じる競争心が、自己を受容する感覚だけでなく、自分以外の他者を受け入れる感覚と深い関連があることが示された。

以上のことから、子どもたちに競争を経験させるかさせないかという議論に加えて、他者に勝利した経験で得られるような自信や自己肯定感をいかに子どもたちに経験させることできるかが、子どもたちの適応的な発達を考える上で重要であると考えられた。また「競争では勝敗が伴うこと」を踏まえて、競争で他者に負ける経験をする者が劣等感やコンプレックス，無力感を抱いてしまわないよう、周りがフォローすることが重要であると考えられた。

働く女性におけるワーク・エンゲイジメントとワーク・ファミリー・コンフリクトの関連 —仕事と家庭の心理的境界を調整変数とした検討—

問題と目的

本研究は、現代における働く女性の職場領域進出に伴って、女性がよりいきいきと働くためにはどのようなことが重要なのかという考えのもと、働く女性のワーク・エンゲイジメントとワーク・ファミリー・コンフリクトの関連から検討を加えることを目的とした。海外等の先行研究より、働く人々に関するポジティブで充実した心理状態を指すワーク・エンゲイジメントの高まりが、仕事生活と家庭生活における役割の両立困難によって生じる葛藤であるワーク・ファミリー・コンフリクトを高める可能性が指摘されている。本研究では、特にその関係が男性よりも女性の方が大きいと考えられることに注目し、働く女性の心理的健康について考察した。

また、本研究では働く女性におけるワーク・エンゲイジメントとワーク・ファミリー・コンフリクトの関連を調整するものとして心理的境界を取り上げ、検討を行った。具体的には、バウンダリー理論に基づいた心理的境界がワーク・エンゲイジメントとワーク・ファミリー・コンフリクトの関連を調整していると推測し、心理的境界の程度によって両者の関係性が異なるかどうかを検討した。ワーク・エンゲイジメントとワーク・ファミリー・コンフリクトの関連について女性に着目して検討したものは未だ少なく、本研究でこのテーマを扱うことは社会的に意義があると言えるだろう。

方法

働く女性を対象に Google Form を用いた質問紙調査を実施し、18 歳から 62 歳までの 203 名 (平均年齢 : 32.42 歳, $SD=13.39$) から回答を得た。質問紙は、性別、年齢、職種、雇用形態、就学の現状、婚姻状況、同居形態、介護の有無、ワーク・エンゲイジメント、ワーク・ファミリー・コンフリクト、心理的境界についての全 55 項目を尋ねる質問で構成された。

結果と考察

相関分析の結果、日本の働く女性において、ワーク・エンゲイジメントとワーク・ファミリー・コンフリクトの間には有意な弱い負の相関がみられ、ワーク・エンゲイジメントの高まりとワーク・ファミリー・コンフリクトの低下が関連しているというポジティブな結果が得られた。ただし、職種によっては有意な相関関係がみられなかったものもあり、職種ごとのもつ働き方の特徴によって両者の関連に違いが生まれることが示唆された。

また、重回帰分析の結果、ワーク・エンゲイジメントとワーク・ファミリー・コンフリクトの関連について心理的境界の調整効果は確認されなかった。心理的境界を統制した場合の偏相関係数においても統制前との差は小さく、本研究においては、心理的境界の程度に関わらずワーク・エンゲイジメントとワーク・ファミリー・コンフリクトに負の相関関係が存在することが明らかとなった。しかし、本研究では心理的境界を測る尺度の利用可能性が指摘され、現代の日本人に即した心理的境界尺度を新たに開発することが今後の研究で望まれる。

ワーク・エンゲイジメントの向上が一般的に推進されている現代であるが、それがすべての人にとって良いものとなるのかという点については、今後も検討していく必要があるだろう。

学校時代の友人関係とセルフ・モニタリングとの関連 —スクールカーストに注目して—

問題と目的

本研究では、大学生におけるスクールカーストの経験に焦点を当て、スクールカーストはセルフ・モニタリング能力に関連するのか、過去のスクールカーストの経験と現在のセルフ・モニタリング能力に関連は見られるのかについて検討することを主な目的とした。個人特性に関してはセルフ・モニタリングに加え、自尊心、孤独感についても扱い、過去から現在にかけての変化と、スクールカーストの地位に関連が見られるのかについても探索的に検討した。

方法

Google Form を用いて質問紙調査を行った。18 歳から 23 歳の男女 136 名 (男性 : 37 名, 女性 : 97 名, 不明 : 2 名, 平均年齢 20.84 歳, $SD = 1.32$) より回答が得られた。なお, 調査対象は過去にクラスにおいて, グループ (休み時間などに一緒に過ごす同じクラスのメンバー, 自身と友人の 2 人で過ごしていた場合も含む) があった大学生とした。質問紙は, (1) グループがあった学年と地位の認識 (スクールカースト), (2) 過去と現在のセルフ・モニタリング, (3) 過去と現在の自尊心, (4) 過去と現在の孤独感を問う項目で構成された。

結果と考察

地位と過去・現在のセルフ・モニタリング, 地位と過去・現在の自尊心, 地位と過去・現在の孤独感に対してそれぞれ相関分析を行った。その結果, 地位と過去のセルフ・モニタリング, 地位と現在のセルフ・モニタリングでは有意な弱い正の相関, 地位と過去の自尊心, 地位と現在の自尊心では有意な弱い正の相関, 地位と過去の孤独感ではわずかに有意な負の相関, 地位と現在の孤独感では有意な弱い負の相関が認められた。また, 個人特性と地位, 時期について探索的に検討するために, 「地位」, 「時期」を独立変数, 「セルフ・モニタリング」, 「外向性因子」, 「他者志向性因子」, 「演技性因子」, 「自尊心」, 「孤独感」を従属変数として 2 要因分散分析を行った。その結果, 「セルフ・モニタリング」において地位の主効果, 「外向性因子」において地位と時期の主効果, 「他者志向性因子」において時期の主効果, 「演技性因子」において地位の主効果, 「自尊心」において地位と時期の主効果, 「孤独感」において地位と時期の主効果が有意であった。

以上の結果から, スクールカーストはセルフ・モニタリング能力に関連していることが示唆された。加えて, 過去のスクールカーストの地位はセルフ・モニタリングや自尊心, 孤独感と関連すること, 自尊心と孤独感においては過去から現在にかけての変化も見られることも明らかとなった。

対面での社会関係資本及び自己肯定感と Instagram の利用の仕方の関連について

問題と目的

本研究では対面における社会関係資本と自己肯定感（他人の評価・充実感・主張・個性の4因子からなる）に焦点を当て、これらが Instagram の利用頻度や投稿する写真・動画の内容にどう関連しているかについて検討した。SNS は様々な形で我々の生活に深く根差している。その中で、本研究は写真や動画を共有することがメインである Instagram に着目し、これまでの SNS 研究をもとに我々とどう関わっているのか、他の SNS との関わりに違いがあるのかについて明らかにすることを目的とした。

方法

Google Forms を用いた質問紙調査で得られた回答の中から、Instagram を利用していると回答した148名（男性：68名、女性80名、平均年齢20.92歳、 $SD = 2.03$ ）の回答を有効回答として採用した。質問紙は（1）フェイスシート、（2）対面社会関係資本尺度、（3）自己肯定感尺度、（4）SNS の利用状況、（5）Instagram の利用状況・利用意識、（6）Instagram への投稿内容頻度を尋ねる質問で構成された。

結果と考察

分析の結果、対面社会関係資本を多く認知する者ほど Instagram の利用頻度が高くなる傾向にあることが明らかになった。また、社会関係資本と Instagram 利用意識の間にも同様の傾向が見られた。対面社会関係資本を多く認知している者ほど、人と関わる機会が多いと考えられ、写真を撮る機会の増加やそれらを周りの人に見てもらいたい、思い出として残しておきたいという考えから Instagram の利用に繋がるのではないだろうか。これらのことから対面での生活と Instagram 利用の間には、これまでの SNS 研究に見られた社会的拡張説のような働きが起きていることが示唆された。

自己肯定感が高い者ほど Instagram における全体公開のストーリーの利用頻度が高くなることが明らかになった。一方で自己肯定感と親しい友達のストーリー利用頻度との関連はあまり見られなかった。自分自身を肯定的に捉えられている場合、誰でも見ることが可能な全体公開のストーリーに写真や動画を載せることに抵抗感も少なく利用していると考えられる。全体公開と親しい友達のストーリーでは自身の自己肯定感に関わらず、写真の内容などによって役割を変えて投稿している場合が多いのではと考えられる。また、自己肯定感が高い者ほど、Instagram 内で人物がはっきりと映る写真や動画の投稿頻度が高くなることも明らかになった。顔や姿がはっきりと映った写真や動画を Instagram で共有するということは自身を肯定的に捉えられている証だと考える。上記のことから、Instagram の利用の仕方には普段の生活や性格が関わっていることが示唆された。

Covid-19 に関するスティグマ影響モデルの検証

—原因帰属, 心理的距離とワクチンの関連性—

問題と目的

COVID-19 に関する差別や偏見が問題となり, それらの要因としてスティグマがあげられる。スティグマとは, 差別や偏見の対象として扱われる属性のことを指す。本研究では, COVID-19 に焦点を当て, スティグマの先行要因として COVID-19 に感染した者への原因帰属に着目し, 罹患歴がある者へのスティグマと罹患歴がある者への心理的距離までの影響過程について検討することを目的とした。また, 原因帰属をさらに先行する要因として, ワクチン接種の有無に着目することにした。

方法

大学生を対象に, Google Forms を用いた質問紙調査を実施した。回答は 18 歳から 24 歳までの男女 108 名から回答を得られ, その内の 104 名 (男性 29 名, 女性 75 名, 平均年齢 19.87 歳, SD = 1.36) を分析対象とした。質問紙は (1)フェイスシート,(2) COVID-19 に感染した者に関する原因帰属,(3) 罹患歴がある者へのスティグマ,(4) 罹患歴がある者への心理的距離,(5) COVID-19 についての知識,(6) COVID-19 についての経験と意識で構成された。

結果と考察

分析の結果, ワクチン接種の有無によって原因帰属に違いがあるとはいえないことが示された。これは, COVID-19 による社会の変化が関係しているのではないかと推測される。また, COVID-19 に罹患歴のある者を内的・外的帰属ともに危険と認識することで, 接触を回避することが示された。COVID-19 は接触や飛沫で感染する病気かつ罹患しやすいため, 「罹患のリスクがある者と接触することで自分自身も罹患するのではないか」といった不安や恐怖を含んだ危険性が強く認知されることが示唆された。なお, 原因帰属の他に先行要因として COVID-19 に関する知識, 経験, 意識に着目した結果, 罹患のリスクがある以上, 罹患のリスクがある者を危険と認知する傾向があることが示された。今後は年齢や職業などの要因を組み入れ検証していくことでスティグマを先行する先行要因についての知見が得られるだろう。

山アラシのジレンマと自己呈示の関連及び、関係満足感に与える影響について

問題と目的

本研究では、山アラシのジレンマと自己呈示の関連と、それらが関係満足感に与える影響についての検討を行うことを目的とした。山アラシのジレンマは多くの青年期が感じており、親密な人間関係の構築に支障をきたす可能性があるとされている。山アラシのジレンマは先行研究において他の概念との関連が検討されたものが少ない。そこで、山アラシのジレンマとの関連があり、関係満足感にも良い影響を与えるとされている概念との関連があることが示されれば、山アラシのジレンマに関する研究への寄与に加え、課題とされてきた山アラシのジレンマの能動的適応策への一助となると考えた。本研究はそれに該当する概念として自己呈示が当てはまるのではないかと考え、山アラシのジレンマと自己高揚的自己呈示、自己卑下的自己呈示及び、関係満足感との間の関連について検討を行った。

方法

山アラシのジレンマを特に抱えやすいとされている青年期(15歳～25歳)を対象に行に Google Forms で作成された個別回答式の質問紙調査を実施し、回答を得られた 112 名の内、有効回答 107 名(男性 58 名,女性 48, 両性 1 名, 平均年齢 20.76 歳,SD = 1.63)を分析に使用した。質問紙は(1)フェイスシート, (2)山アラシのジレンマについての質問, (3)自己高揚的自己呈示についての質問, (4)自己卑下的自己呈示についての質問, (5)関係満足感についての質問, それぞれを問う尺度により構成されていた。

結果と考察

山アラシのジレンマの対他の要因と自己卑下的自己呈示との間に低い正の相関が得られた以外では、有意な相関は見られなかった。また、男性では山アラシのジレンマの対他の要因だけでなく、対自的的要因においてもそれぞれ中程度の相関が見られたのに対し、女性ではそれらに有意な相関は見られなかった。

以上のことから、山アラシのジレンマや自己呈示の間には関連があることが示されたが、それらと関係満足感の間には関連がない可能性が示された。関係満足感というような曖昧な質問ではなく、さらに関係の親密さを問うような質問にすることで違った結果になる可能性が考えられる。また、性差における違いというものも見られたため、先行研究の多くない山アラシのジレンマ研究における新たな切り口も提示できたといえよう。

文化的自己観が自己意識を媒介して自己肯定感に与える影響

—男女による影響過程の違いに着目して—

【問題と目的】

日本人の自己肯定感の低さは、近年注目を集めている。今までに、自己肯定感に影響を与える要因として公的自己意識が挙げられてきたが、影響過程については安定した結果が得られていない。そこで、公的自己意識に影響を与える要因に着目し、公的自己意識が自己肯定感へ影響を及ぼす過程について検討することを、本研究の目的とする。本研究では、公的自己意識に影響を与える要因として、日本人の価値観を表す概念であり、公的自己意識を促進するとされる相互協調的自己観を挙げ検討する。また、社会集団における自己認識の性別による違いに着目し、公的自己意識を媒介要因とした相互協調的自己観が自己肯定感へ与える影響過程について、男女を比較することを第二の目的とする。

【方法】

Google Forms を用いた質問紙調査を実施し、18歳から25歳の大学生、大学院生286名(男性105名、女性181名、平均年齢20.59歳、 $SD=1.40$)を分析対象とした。質問紙は、(1)フェイスシート:性別、年齢、学年、電話番号の下4桁(2)自己肯定感尺度:18項目(3)自己意識尺度:10項目(4)文化的自己観尺度:10項目で構成された。

【結果と考察】

対象者全体のデータを使用した媒介分析の結果、公的自己意識が媒介変数として役割をなしていることや、相互協調的自己観が公的自己意識を促進し、公的自己意識が自己肯定感を抑制していることが明らかになった。それゆえ、他者との調和に価値が置かれる傾向にある人は他人からの評価に敏感になる傾向があり、自己を偽るという否定的な意識が生じることで自信を低下させると考えられる。ただし、媒介分析の結果から、相互協調的自己観は自己肯定感に直接影響している可能性も残されているとも考えられた。また、男女別に媒介分析を行った結果、女性のみ公的自己意識の部分媒介が認められた。そのため、男性よりも女性の方が、他者との調和に価値が置かれる人ほど他人からの評価に敏感になるという傾向が強く、他者から評価に敏感になることで自己を偽るという否定的な意識が生じ自信を低下させるという傾向が強いと考えられる。

また、仮説として検証しなかったものの、相関分析から明らかになったことがある。まず、公的自己意識と自己肯定感の間には負の相関がみられたが、私的自己意識と自己肯定感の間には有意な相関が認められなかった。次に、相互協調的自己観は公的自己意識との間に負の相関がみられたが、私的自己意識との間には有意な相関が認められなかった。そのため、自己肯定感を促進する要因については、今後も検討していく必要があるだろう。